

504

278

真宗安心論

伊藤 忠良  
名々をたのむか



始



石川舜台著  
眞宗安心論

第一編

佛體をかむのた  
名號をかむのた



京・都・東山

中外出版株式會社



# 佛體をたのむか

## 名號をたのむか

### 第一章

#### 祖師は佛體をたのまれたか

宗門の安心は祖師を標準とする。祖師の安心を標準とせぬ人は、其人は宗門を離脱したのである。其祖師を捨た人である。

眞宗に於て、古くより、佛體をたのむ安心を、正しいといふ人あり。又名號をたのむが正しいといふ人あり。香月院の如きは、御文を佛體た

のみの安心といふ者あるも、心得そこなふたのである。當流は佛體の徳を名號におさめて、名號で安心を定める。是が五百年來相傳の正統であ

るごいふた、拙著『眞宗安心の根本義』に委しく其語を出しておいた。

香月院は、我宗門優秀な學者で、門下も廣かつたのであるから、此正統説が、僅に百年以後の今日のことであれば、相當に傳つてあると考へて居たが、一向少ないやうであるは、どうしたことであらうと不審にも思ふたが、又考へれば、祖師の指南の語にさへ、心をおかぬ人なれば、香月院の語などは、馬耳東風なのであらう。

是等の人は、惡知識惡友等の因縁で、佛體たのみが痼疾となつて、見れども見えず、聞て聽えない、惡性病となつたのであらう。是等の痼疾迷習の人は、いやでも先づ祖師の安心の、如何であつたかを知るが、痼疾退治の療法である。此妙薬は左の數箇條である。

一尊號銘文本ニ如來より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をこりて、臨終の稱念をまつべからず、たゞ如來の至心信樂をふかく

たのむべし。この眞實信心をえむとき、攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらゐに、さだまるこみえたり。

二唯信鈔文意一本願他力をたのみて、自力をすつるをいふなり。

三高僧和讃道綽の下 本願他力をたのみつゝ。

四正像末和讃疑惑讚の下 佛智うたがふつみふかし、この心おもひしるならば、くゆるこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのむべし。

五正像末和讃述懷讚の下 蛇蝎姦詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ、如來の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせむ。

六御消息集三念佛をふかくたのみて。

祖師が安心に、たのむと仰られた語は、此六語なり。此外に、たのむの語なき安心の示教は、いろ／＼あれども、今之を出さず、但し法を所歸となされたるは、いづれも同じ。

かくの如く、至心信樂をたのむ、本願他力をたのむ、佛智の不思議をたのむ、如來の廻向をたのむ、念佛をたのむ、こはあれども、佛體をたのむと、仰られたことなく、佛體をたのむと見ねばならぬ語もなし至心信樂も、本願他力も、佛智不思議も、廻向も、念佛も、皆彌陀の法であつて、佛體でないことは、明々白々である。然れば祖師の安心は、法をたのむ安心であるといふは、いかに巧辯なるも、之を塗抹することは不可能のことである。之を法の統一に歸すれば、至心信樂も本願他力も、佛智不思議其他も、名號に歸する故に、法の名は、至心信樂本願他力等と差別すれども、一名號に外ならず、唯信鈔文意<sup>十二</sup>に故使如來選要法の文を釋して、法といふは名號なりと仰られた、唯一無二の名號の外なし。

祖師の御語かくの如くであれば、祖師の安心は、其の所歸は彌陀の法であつて、決して彌陀の體でなし、かく明白なことであるに拘らず、佛

體をたのむを、正統の安心だといふのは、狂して居るのか、失心して居るのかと怪しまれる。或は此佛體をたのむ安心を、正統だなどと主張する人は、祖師の聖教を讀まない人かもしれない。和讃も讀んだことのない人かも分らぬ。祖師の聖教を讀み、和讃を讀んだ程の人ならば、祖師に法を所歸とするところのあるといふだけは、承知の筈である。之を承知して居る程の人ならば、佛體をたのむのが正統だなど、いふ、無鐵砲は云はれぬ筈である。

しかし是はそうではない、是等の祖語は讀んでも佛體をたのむといふことを、妄想し手作りして、佛體のいかなるかをも研究せず、佛體をたのむといふことばのみを鵜呑にして、妄想し、手作りして、習癖となつてある爲に、祖語に何とあつても、研究する考なく、見つゝ誦しつゝ、無意識に通らぬけ、念頭におかぬのか、又は説教に、法話に、習癖の妄

想安心を、五年十年多數聽衆に説き聞せた上は、或は不可なるに心づき、或は不審が起り、又は研究せむと氣づきたる人あるも、數年説話し來た佛體たのみを懺悔し、告白することを耻ぢて、其不可を知りながら、改むること能はざるも多かるべく、種々の事情も多かるべし。是等は氣の毒乍ら、法を賣る商人なるのみならず、事實は贖物商賣の常習者と評せられても、之をいなむことはできぬのであらう。猛省一番して、祖師の安心に背かぬ、眞の説法者となられ、眞の救濟の傳道者となられむことを忠告す。

以上の説明で、眞宗の安心は、佛體をたのむものでなく、法をたのむ安心であるといふことは、半點も疑のないことなるは、明白であるが、猶祖師の此安心、即ち法をたのむ安心であるとは、彌陀の願意、釋迦の教説、龍樹の論判、善導の釋義、的確明著なる相承であつて、佛語を傳

へられた安心であることを知られたい。

彌陀の願意は、十七、十八、十一の三願に在ることは、何人も承知のこと、此三願の中、安心は往相信心の願と名づけられた、十八願なるは無論である。此願文に佛體を所歸とするといふは、全く見るこゝが能きぬ。

釋迦の教説は、此願意を説れた、十八願成就文である。此成就文は、祖師が、信卷六要會本五六に横超とは願成就、一實圓滿の眞教、眞宗是なりと仰られて、此願成就文は、一實圓滿の眞教であつて、眞宗といふは、此文であると定判なされてある。此願成就文は、現文分明に、聞其名號と、名號所歸を説せられてあつて、佛體を所歸とせよとは、説てない。

龍樹の論判は、簡短であるが、文は釋迦の願成就文同意で、願成就文

の註釋ともいふべきものなり。而も佛體所歸に非る明白の釋である。十住毘婆沙論易行品第九、彌陀章に云、人能く是佛の無量力功德を念ずれば即の時、必定に入る、是故に我、常に念ずと、此文は、十八願成就文を、偈文となされたものである。無量力功德とは、法である、佛體でない。同じ十住毘婆沙論釋願品第五に、佛功德力とは、一切去來今佛、功德智慧、無量の深法、等しくして差別なし。但し諸佛の本願因縁に隨ひて、或は壽命無量あり、或は見る者、必定に入るあり等と説く、此一段文長し、故に今略して引く。之を要するに、諸佛の威力功德は、平等にして差別なし。しかしそれは、佛の自證である。佛の自證は、一切諸佛平等であるが、衆生を度するに至りては、本願の因縁を以て、差別して同じからずと判ぜられたのである。此同じからざるが、即衆生をたすけたまふ法である。此法を今の文には無量力功德と云はれたので、それが即名

號の法である。此法をたのむが、即其佛に歸する相である。

善導の釋義は、往生禮讚二先づ其安心を述て、自身は是煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して、火宅を出でずと信知し、今彌陀の本弘誓願、名號を稱すること、十聲一聲等に及ぶまで、定て往生を得と信知して、乃至一念疑心あることなしと云ふ。即法を所歸とする安心で、猶其他佛を念せず、偏に彌陀にのみ歸せよと勸むる意味を、自問自答して闡明せらる。同書四問て曰、一切諸佛、三身同く證し悲智果圓にして、亦應無二なるべし、方に隨て一佛を禮念し、課稱せむに、亦應に生る、ここを得べし、何が故に、偏に西方を歎じて、専ら禮念等を勧ること、何の義かあるや。答て曰、諸佛の所證は、平等にして一なれども、若し願行を以て來り收るは、因縁なきにあらず、然るに彌陀世尊、本と深重の誓願を發して、光明名號を以て、十方を攝化し但信心求



念せしむと。此文、問は、三身同證の佛體を擧て、佛々平等を以て、救濟を願ふ者の差別することを難す。答は、佛體は、自證の果は佛々平等なれども、然れども、衆生を救濟するは、因位の願行の因縁を以て、來り收むる故に、佛々差別して平等ならず、彌陀は、衆生の機を選ばず、光明名號を以て、十方衆生を救濟したまふ深重の誓願力あり、たゞ信心求念するのみにて、往生の益を得させたまふ、此故に西方往生のみを勸るなりと答られたので、即ち上の安心の如く、彌陀に限る所の、深重誓願の法を以て、答へられたのである。全く龍樹の義門と同義である。

元祖の相承亦是の如くである。和語燈錄一大經釋に云ふ、いづれの佛も、成佛已後は、内證外用の功德、濟度利生の誓願、いづれもく皆深くして、勝劣あることなれども、菩薩の道を行じたまひし時の、善巧方便の誓、皆これまち／＼なることなり、彌陀如來は因位の時専ら我名

號を念ぜむ者を、迎へむと誓たまひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向したまふ、濁世の我等が依怙、末代衆生の出離、是にあらずば、何をか期せむやと。

佛體の自證は、佛々平等なれども、衆生をたすけたまふ法は、因位の本願因縁に依るが故に、佛々悉く差別あり、之を南岳の大乗止觀法門四には、常同常別と稱し、縷々として其理由を釋してある。彌陀の本願は、常別の法の中の、奇特最勝の法であるから、彌陀は之を超世の願と仰られ、阿彌陀偈經には、發願諸佛に踰ると説く。祖師は、此奇特最勝の法に歸せられた安心であるから、本願をたのむ、廻向をたのむ、佛智をたのむ等と仰られ、本願の核心を標しては、至心信樂をたのむと云ひ、其果徳よりは、佛智の不思議をたのむと仰られ、能廻向の大悲心より廻向をたのむと云ひ、所廻向の名號の行相より、念佛をたのむと仰られたも

のなり。是の如くの譯であるから、祖師の安心は、確乎として、法をたのむ安心である。

是程明白な祖師の安心に違して、佛體をたのむを、正統の安心だなどといふは、ごうした大間違であらう。殊に尤らしく所信は名號で、所歸は佛體ぢやなご、臆面もなく云ふ者がある。又は名體不二である。何故に佛體を嫌ふかと、現に見聞したは、此二説が、學者めいた申分であるから、少しく其方角違の申分であることをいふて見やう。

所信は名號で、所歸は佛體ぢやといふは、何の據があつて云ふのか。此説に對しては、一に祖語に其證ありや否や、二に文證はなしとして、義門は何の理に依て成立することができるか。第一に、祖師には其やうな釋はない、却て信と歸とは、一つになされてある明信佛智を、佛智の不思議をたのむべしと仰られた類なり。又所歸といふ歸の字は、歸命を

云ふのであらう。報身報土を所歸とし、教行信證を能歸の機とする歸ではあるまい。所歸とは所歸命でなくては、所信は名號とすると對を爲なさぬ。所信とは信ずる所で、信ずる所は名號と云ふのであらう。所歸は佛體と云ふは、歸命する所、即ちたのむ所は佛體とすると見える。

所信は名號と云ふは、聞其名號信心歡喜に依たのであらうか。然るに所信は、名號所歸は佛體と其やうな分別は出來ぬのである。御文三七に一向に彌陀に歸し、一心に本願を信じとあるなどは、本願即名號と見れば、合ふやうであるが、いけぬ。此文の直ぐ次に彌陀如來を信じとあるから、所歸は佛體の規則破壊である。其外、一五<sup>十</sup>には、ふたこゝろなく彌陀を信ずるばかりなりと云ひ、二三には、彌陀を一心一向に信樂してと云ひ、三三には彌陀をよく信ずる心だにもひとつにさだまればと云ひ其他にもあり。又本願に對して、信ずると云はず、歸すると云ふは一三

には本願たのむ決定心と云ひ、四二には本願をたのむと云ひ、同三には此本願をたゞ一念無疑に至心歸命したてまつれば等と仰られてあり。佛と法と交互してある。何故に所信は名號、所歸は佛體と定むることができるか。(佛又は彌陀とあれば佛體であるとする人に假に共許して)祖師に之を伺へば、尊號銘文本五願力に歸命すれば、五道生死を閉る故に自然閉といふなりと仰られてあれば、佛體に歸命するのではなく、法に歸命なされてあつて、却て佛體に歸命された御釋はない。歸敬の歸命はあるが、安心の佛體歸命はない。同八に天親菩薩の歸命盡十方無碍光如來願生安樂國の文を御釋なされて、世親菩薩(即天親菩薩)かの無碍光佛の願行を信じて、安樂國に生れむと、ねがひたまへるなりと仰られて、歸命を信じてとし、なき願行二字を増加して、願行を信じてといふ法を信ずる安心となされてあり、佛體歸命の安心ならば、願行の二字は、加へら

るべきでない。

所歸は佛體ぢやといふは、全く祖釋にないことである。祖釋にないことを、無遠慮に主張せられるは、どうした間違たことであらう。更にこゝに入念しておく、自分が謂ふ所の安心は、祖師の安心である。祖師に違戻した安心は、何人にあれ異安心である。祖師入寂以後、眞宗に出られた絶世の英豪は、覺師蓮師である。此二師と雖、祖師に對すれば、師資の別である。故に二師と雖、若祖師の安心に違背せられてあるならば之を先徳として尊崇することはできぬ。況や其他に於てをや。

若も所歸を佛體といふ人は、蓮師の御文、及び改悔文に、歸命のこゝろを、阿彌陀如來をたのむとあるを、之を所歸は佛體なりといふのではないか。若それであるならば、蓮師の意を誤るもので、文を看るの放漫にして、安心を取扱ふの不謹慎を、惜まざるを得ない。蓮師に關するこ

とは、六章七章に至りて詳にするであらう。

此謬見から、祖師の安心を見るに、祖師は法をたのむ安心の語多く、蓮師は佛體をたのむかたが、主になつてあるやうで、二箇の型式と見ゆる所から、工夫して、之を一ならしめむとするより、名體不二の語をあてはめ、或は人法不二などの熟語を捉へ來り、調停して一とする手段を工夫し出したものに非るか。さて工夫し出した名體不二を持出して、調停せむとするも、法門を看るの粗雑と、佛體をたのむを久來正しと思込たる偏頗の熱心から、祖師の本願をたのむ、佛智不思議をたのむ、至心信樂をたのむ等の、明白な法をたのむ安心を見ても、餘りありがたくなき殊に法をたのむ安心を勸むる人を見れば、殆ど黨派的執情となつて、惡言罵聲をあびせかけて快となし、或は彼は異安心であるなど、かげぐちをき、少しく穩な方なれば、名號をたのむ安心の者は佛體を嫌ふこ

云ふ、祖師と同じき安心を異安心といふは沙汰のかぎりであり、佛體を嫌ふなどは、心理状態さへわからぬ申かたで、其佛所成の法に歸して、其法能成の佛を嫌ふなどは、あり得べからざることである。世間遊戯の些事に例しても、所成の畫の勝れたるを愛敬すれば、能成の畫人をも敬愛す、是心理状態、天成の機動なり、況や心意性相の學ある人ならば、かゝることは、思ひもつかぬことである。愚蒙憐むべきの至りである。

又既に名體不二といふ以上、難者自身に佛體は名號と一であること知つたのでないか。然らば名號に佛體が具してあるは、難者に於て明瞭な筈である。其佛體が、急に名號をたのむ人にも、消てなくなるではあるまい。其れを、是が非でも、法をたのむ安心は、佛體のない安心と難ずるは、文證も理證もなくして、強誣妄言するのである。

吾人の安心は、法をたのむ安心である。此安心は、祖師に教へられ、

祖師の教に同心した安心である。吾人の安心を異安心と云ふなら、祖師の安心も異安心で、奇々怪々、天下豈かゝる怪事あらむや。祖師を異安心にしたなら、其末徒は何であらう。絶倒の至りと云ふべきである。以下難者云ふ所の名體不二は、いかなる義門かを述べて見やう。恐らく是も不穿鑿なる難者には、意外の事と思はれるであらう。

名體不二といふは、六要鈔會本八九に出る。其文云、凡彌陀佛は、名體不二の道理あるに依て、其名號を稱するに則佛體を具す。華座觀に、應聲即現證得往生と云ふ。蓋其義なりと、(此說、意外と思ひ、批判を加ふる者あるべし。應聲即現の聲を、多く釋迦が、阿難及び韋提希に告げて諦聽諦聽善く之を思念せよ。佛當に汝が爲に苦惱を除く法を分別し解説し玉ふべしと宣べさせられた聲ぢやと云ふ。今存覺は、韋提の念佛の聲となされる。然るに經文には韋提念佛するとは説いてなし、吾人は善

導の疏によりて、研鑽して得る所あり。今の必要に非る故省く、猶此韋提念佛の聲とせられしにつき、存覺以前に此説ありやを調査せしに亦得る所あり。是も今其要なき故省く、讀者の注意を乞ふ爲に之を記す。是韋提が、華座觀に、釋迦如來の説法を聞て、口に稱名した聲に應じて、住立空中の彌陀が現れさせられた。聲は韋提の念佛の聲、應じて即現したまふたは、彌陀の佛體、それを名體不二と釋したので、稱へる名號に佛體を具するを、名體不二と申されたのであるから、信ずる名號にも、佛體を具するは同一理なり。

蓮師が名體不二と仰せられたは、帖外御文三四愚癡惡見の衆生をたすけたまふをさきとする故に、名體不二の正覺をこなへましますゆへに、佛體も名におもむき、名に體の功德を、具足するゆへに、なにこはかくしくしらねども、往生するなりと。此文は、安心決定鈔を節取なされた

ものであるが、文に増減あるは、蓮師の御注意なされたものご伺はれる。此文も、存師と同じく、佛體の徳を名號に具したるを、名體不二ご仰せられたので、佛體の徳を名號に具するは、行卷所引の、元照の萬徳總て四字に彰るの文、戒度の文、法位の文、皆佛徳の、名號に具するの文なり。是等の御引用なれば、祖師も亦此意なるは論なし。諸佛も、徳を名に彰すは同一なれども、之を衆生に廻向して、佛體の果徳を、直に衆生の徳ご爲し、直に成佛の眞因ごしたまふは、彌陀の超世願なる所以である。

吾人がたのむ所の法は、佛體の果徳を具した名號である。祖師の安心ご同一の法である。之を彌陀廻向の法ご云ふ。此法の廻向を領受した安心を指して、佛體を嫌ふご云ふならば、謬妄の甚しきごいふべきか。法を知らざるの狂語ごいふべきか。然らざれば、強誣孟浪の窮語ごでも云

ふべきであらう。祖師が、唯信鈔文意に聞名念我ごいふを釋して、聞名念我ごいふは、聞はきくごいふ、信心をあらはすみのりなり。名は如來のちかひの名號なり。念我ご申すはこのみなを憶念せよごなり。諸佛稱名の悲願にあらはせり。ごあるは、諸佛稱名の悲願に酬ふて、釋尊は、諸有衆生聞其名號等ご説かせられし名號で、念我ごは彌陀の語型ごして我を念ぜよごあるを、我ごあれば、無論彌陀が、佛自身を、即ち佛體を指て、我ごいふ字を用ひたのであらうに、此御名ご仰せられたは、佛體らしき我を、御名ごなされたので、かくなされた意味は、法を頼む安心なるが故であるご、佛體を法に具するからであるご、此二つの理由で、このみなご仰られたごご、伺はれる。此御釋及び、下に説明する無碍光佛の願行を信じての御言の如きは、尋常一樣の解釋でない。祖師には、かゝる御釋が少なからずある。此尋常ならぬ御釋には、心力を盡して伺

はねば、祖意は得られぬ。而して此尋常ならぬ御釋のある所は、必ず祖意の、尋常ならぬ所を、伺ふべき深き意味あるを、慎重に考へねばならぬ。是は祖師に限つた事でなく、各宗祖師古今聖賢の書、悉く此類である。其れは何故ならば、吾人淺識者の、及ぶことのならぬ所見が、行文中に在るからである。之を解すに力を用ひぬ讀書の仕方ならば、いかに萬卷の書を讀むも、終身吳下の阿蒙であつて、書物箱の代用くらゐで、無用の人たるに終るであらう。

問曰。なる程、祖師は、法を所歸として安心を教へられたことは、甚多いが、しかし歎異鈔に、彌陀をたのむといふ語あり、是は佛體をたのむこと、見ゆる。是をも法をたのむとするのであるか。

答。同鈔十四章に、彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつる等とあること、問の如し。然れども同鈔は祖師親撰の書でないから、祖語とはいひ

がたし、殊に十三章の如きは、祖師の語は、故聖人の仰にはと云ひ、之を結びて、仰候ひしなりと云ひ、又御消息にと標して、あそばされ候こと結び、祖語と、記者の語とを、紛れぬやうに分ちあり。十五章も、祖語と記者の語を分つこと、十三章の如し、十四章は、祖語とすべき文なく全章、記者の語と見ゆ、故に彌陀をたのむの語は、祖語の中へは、加へざりしなり。

しかし此鈔の記者が、如信上人であつても、唯圓房であつても、既に此時代に、彌陀をたのむといふ語の、使用せられた事は確であつて、祖師も之を嫌はせられることはなかつた。又嫌はせられる筈はないこと、考へられる。其れは何故なれば、後世物語は、唯信鈔、一念多念分別事と共に、門下の人に讀まむことを御勸になつた書である。而して後世物語には、阿彌陀佛をたのむと云ひ、彌陀をたのみたてまつりてとも云ふ

てある。是と歎異鈔とを合せ見れば、祖師は此語を嫌はせられたとは思はれぬ。只歎異鈔では、彌陀をたのむ語は僅に一回なるに、三章に他力をたのむの語三回、十一章に誓願の不思議をたのむ、十四章に、攝取不捨の本願をたのみ一回、願力をたのみ一回、他力をたのみ一回、以上法を所歸とする語八回で、彌陀をたのむの語は一回である。

是の如くであつて、而も祖師には、彌陀をたのむの語一回もなし、是を考察すれば、祖師が、法を所歸とせらるゝのみならず、門下の上足も法を所歸とし、聖覺の唯信鈔も本願をたのむ信と云ひ、後世物語にも、佛力をたのまず云々。又彌陀の願力をたのみ、他力をたのみと云ひ、隆寛の一念多念分別事には、一念無上の功德をたのみ、彌陀の願をたのみと云ふ。此を以て之を見れば、法然門下は、法をたのむ安心なりしは、吾祖のみの事でない。元祖の法をたのむ安心なるは、和語燈録を見て知るべし。

然れば祖師は、法をたのむもよし、佛體をたのむもよしとせられたのであらうか、若然りとすれば、安心は二様なる。若法を所歸とすれば法は廻向の法である。佛體を所歸とすれば、佛體は廻向の法でない、隨て種々解しがたい義門を生じ來る。其一例を云へば、所歸は、所歸其物が明に解されねば、信は成立せぬ。信と歸との一なるは、前にも一言せしが如し。信の説明は、六要會本三<sup>四</sup>一<sup>十</sup> 百法論疏の、云何なるを信と爲す。實と徳と能とのうへに、深く忍し樂し欲して心淨なるを性と爲し、不信を對治して、善を樂<sup>樂</sup>ふを業と爲すの文を引く、佛教に、信ずるといふは、是が定義である。

佛體の實とは、如何なる者であらうか。二身門にて云はゞ法性身であらう。是は愚惑の衆生のわかるべき筈でない。徳と能とは、方便法身で



あらう。是も亦漁翁樵夫の解せらるべきでない。解せられぬなら、忍せられぬ。忍とは認可を云ふ、忍せられぬば、樂欲はない。つまり信の立やうがない。此定義に嵌らぬ信は妄信とは云ふべきも信ではない。

若、法を所歸とすれば、法は凡夫のわかるべき程度になつてある。故に實徳能もよくわかる。解れば定義の如き信は立つ、一は學者もわからぬ佛體、一は愚人のわかる名號。是では安心が二途となる。廻向の法と非廻向の法とは、更に紛淆を重ねるのであらう。

然るに阿彌陀佛を釋するに、人法二義がある、是は何人も知る所である。人とは安樂の能人で佛である、法とは、法に復二義あつて、一は即是其行なり、二は攝取不捨なり、攝取不捨は今暫く論ぜず、即是其行は善導が立義分ハに、言ハ南無者、即是歸命、亦是發願廻向之義言ハ阿彌陀佛者即是其行以斯義故必得往生と釋せられた中、阿彌陀佛を佛と言は

ず、之を行と言はれたを指す。祖師が是認された彌陀をたのむの彌陀は、人の佛を云ふのであるか、即是其行と言はれた行を言ふのであらうか。

人か、行か、是を定めざれば、祖意解しがたし、彌陀をたのむとある彌陀を、何の考究も爲さずして、直に佛體とするは、法をたのむ安心を常とされた祖師の語を、無批判で確定するは、餘りに早計である。然らば之を定るに、いかなる計量器を用ひて定めむとするか。曰、祖師の語に依て定むる外、方法なし。經を以て經を釋すると云ふが如し。

之を祖師の語に求るに、天親の歸命盡十方無碍光如來を釋せられた語は、最適當であらうと思ふ。之を適當であらうとするは、盡十方無碍光如來は、尤佛體らしき語であるが故である。而して之を詳に釋なされたものは尊號銘文である。銘文本八七云、世尊我一心といふは、世尊は釋迦如來なり、我といふは、世親菩薩のわがみこのたまへるなり。一心とい

ふは、教主世尊のみことを、ふたごころなく、うたがひなしとなり。すなはちこれまことの信心なり、歸命盡十方無碍光如來とまうすは、歸命は南無なり、歸命とまうすは、如來の勅命に、したがひたてまつるなり。盡十方無碍光如來とまうすは、すなはち阿彌陀如來なり。この如來は光明なり、盡十方といふは、盡はつくすといふ、ことごとくといふ。十方世界をつくして、ことごとくみちたまへるなり。無碍といふは、さはることなしとなり、衆生の煩惱惡業にさへられざるなり。光如來とまうすは阿彌陀佛なり、この如來はすなはち不可思議光佛とまうす。この如來は智慧の相なり、十方微塵刹土にみちたまへりとしるべしとなり。願生安樂國といふは、世親菩薩、かの無碍光佛の願行を信じて、安樂國にむまれむとねがひたまへるなりと、以上其文である。

此文を解するに、先づ祖師が、此文を解説なされたは、何の經文を據とし、何の釋文を参考して、此解釋をなされたかを定め、次に其意義を説明することとする。

據は、十八願成就文なり、参考は曇鸞の論註善導の立義なり。是は眞宗の聖教を、少しく心得た人なれば、直に合點せられることである。一心が願成就文の一念であることは、信卷末の一念と言ふは、信心二心なきが故に一念と曰ふ、是を一心と名くことある。一心と名くことは、天親菩薩が、一念を一心と名けられたること、信心も願成就文の言なり。然れば教主世尊のみこと、いふは十八願成就文のことで、随つて此天親菩薩の言は、願成就文の意なりと定められる。歸命盡十方無碍光如來を、南無阿彌陀佛となされたが、願成就文同意なれば、聞其名號の教主世尊のみことを、ふたごころなく疑なき安心なるが故と、曇鸞が論註上一三經の體を釋して、佛の名號を以て經の體と爲すと定判され、此論主が普

共諸衆生往生安樂と、誘引せられた衆生を、同卷<sup>三</sup>願成就文の諸有衆生と釋されたは、同じ果を得むとすれば、其因も同じからざるべからず。誘引の衆生が、聞其名號信心歡喜の因なれば、論主も亦同じく聞其名號の因ならざるを得ず。無碍光佛の願行を信じての語は、願行具足を釋せられた、善導の六字釋より來る。

意義を解すれば、歸命は南無なりとは、漢語を梵語となされたので、何の必要ありて、かくなされたかと云ふに、是は歸命盡十方無碍光如來を、南無阿彌陀佛であること知らしめる爲である。此尊號銘文の御釋のみならず、末燈鈔<sup>六十</sup>にも、歸命は南無なり、無碍光佛は光明なり、智慧なり。この智慧は阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の御かたちをしらせたまはねば、其御かたちを、たしかに、しらせまいらせむとて、世親菩薩御ちからをつくして、あらはしたまへるなり。とありて、光明は衆生を攝取し

たまふ力用で、衆生の煩惱惡業にさへられず、たすけたまふはたらき、即ち上に云ふ阿彌陀佛を法とする二義の中の一なり。之ありて衆生が、愚癡邪惡のまゝ、たすかるのであるから、それを知らしめる爲に、天親菩薩が、盡十方無碍光と仰せられたもので、其れが別の事ではなく、即六字中の阿彌陀佛であり、此六字名號が、天親菩薩の安心であること教へさせられたものである。

尊號銘文の釋は、末燈鈔の釋よりは長いけれども、こゝろは全く同じである。既に歸命盡十方無碍光如來が、南無阿彌陀佛であること知れば、善導の六字釋の如く願行具足であるから、斯義を以ての故に、必ず往生を得ることある如く、天親菩薩、かの無碍光佛の願行を信じて、安樂國に生れむと、ねがひ玉へるなりと仰せられたものである。又願行をの語を加へられたは、單に無碍光佛を信じてにて足ることなれども、佛體を信

ずる安心でなく、願行なる法を信ずる安心なるを示されたものである。こゝに於て、善導の六字釋と天親の歸命盡十方無碍光如來と、願成就文と、全く同一のものとなる。

此祖師の指教に依れば、高僧和讃に、盡十方の無碍光佛一心に歸命するをこそ、天親論主のみことには願作佛心とのべ玉へとあるは、南無阿彌陀佛を安心として、阿彌陀佛一心に南無するをこそ等と仰せられたのである。又其前の讚に、天親論主は一心に無碍光に歸命すとある。無碍光に歸命すとは、阿彌陀佛に南無するといふことで、名號の阿彌陀佛四字を所歸とし、南無二字を能歸となされたのであるは、明々白々である。之を更に略して言へば、彌陀をたのむとなる、是は何人も、一語の異論もないであらう。

此祖師の指教を以て、前に經を以て經を釋するといふが如く、祖師の語を以て定むれば、彌陀をたのむといふは、阿彌陀佛を南無するといふので、即ち南無阿彌陀佛であることは、釐毫の疑なし。彌陀をたのむが南無阿彌陀佛である以上は、彌陀をたのむの彌陀は、人でなくして法である、即是其行の彌陀である、是も亦釐毫も疑ふべき餘地がない。

然れば彌陀をたのむといふは、即是其行攝取不捨の法をたのむのである。是の如くである以上は、法をたのむは、徹底的祖師の安心である、祖師の安心を非とするは、祖師を忘れた人である、祖師を忘れて安心を論ずるは、驚くべきことでないか。

元來善導が、阿彌陀佛といふは、即是其行なりと申されたのが、意外な釋であつて、阿彌陀佛とあれば、直に佛體と思ふべきこと、若しくは行の字に着眼して、稱名すること、するかであるべきに、其れならば南無も共に行でなければならぬ。然るに南無は歸命と發願廻向で、阿彌陀

佛のみが行では、ますくわからぬ。是は人意の表に出る釋である。然るに眞宗では、南無阿彌陀佛を體とし、(信卷本欲生の下に、眞實の信樂を以て欲生の體と爲る也と云ひ、信樂の下に、即ち利他廻向の至心を以て信樂の體と爲るなりと云ひ、至心の下に、斯至心は則是至徳の尊號を其體と爲るなりと釋せらる。要するに、名號を信心の體とするなり、即ち文には、四六それ南無阿彌陀佛といふは、すなはちこれ念佛行者の安心の體なりとおもふべし。同<sup>四十一</sup>一流安心の體といふこと、南無阿彌陀佛の六字のすがたなりとしるべし)其相を信心となされるは、又一層の意表の外の教である。安心といふは、凡夫自心の安心である。其れならば自心天性の心所が體でなければならぬ。心所といふは、心所有の法といふことで心所有とは心の所有して居るといふこと、此心が所有して居る法則が、五十一種ある。貪欲瞋恚などの煩惱も心所である。信は信の心所

が體、願は欲の心所が體といふやうに、人の心の心所が體である筈なるに、名號が體であるといふは、こんだ事である、是は一層意想外のことである。

意想外の即是其行、意想外の信心の體、之を解するには、讀過し去る、看過し去るといふやうな、小説を讀むやうな心持では、わかるものではない。生死の事は大である、心力を傾倒して伺はねばわかることではない。今人意の表に出た一つの言阿彌陀佛者即是其行は、當面のわからねばならぬことである。かく云へばさて、即是其行さへわかればよいと云ふのではない。今上に、祖師の釋義から、彌陀をたのむといふは、阿彌陀佛を南無するといふことで、彌陀をたのむといふ彌陀は、即是其行と解釋された阿彌陀佛であるといふに就て、阿彌陀佛即是其行を、よく解さねばならぬといふのである。

即是其行を、祖師は行卷に、即是其行と言ふは、即選擇本願是也といふてある、選擇本願と云へば、無論十八願の事であるが、わかつたやうな、わからぬやうな解説である。是はごうした意味であらう、手早く云へば、四字と雖六字なりの意である、選擇本願は南無阿彌陀佛といふ本願であるから。

猶前に發願廻向と言ふは、如來既に發願して、衆生の行を廻施したまふの心なりとあるを、併せ見ねばならぬ。衆生の行なる即是其行、其行の其といふは、近く物を指す辭で發願廻向を指す、故に其行とは、發願廻向の行といふが如し。發願廻向は、約法の釋と、約機の釋とあり、何故此二義あるかなれば、元來彌陀成就の名號であるから約法の釋あるべし。廻向に依て衆生のものとなる名號中の發願廻向故、約機の釋あるべし。約機の釋は、尊號銘文末の始にある、今行卷のは、約法の釋である。

約法であるから、即是其行は所廻向の行で、發願廻向は能廻向の彌陀の心である。彌陀は、衆生の行として廻施するのであるから、四字と雖六字である。何故なれば願行相具せなくては希望は達せられぬ。行のみでは孤行である。私の行く處はここである、と云ふて歩して居るのである。行のない願は虚願である。富者にならうと願ひながら、遊食徒手して居るのである。故に願と行とは、具足しなければならぬ。阿彌陀佛は行である。行のみの虚行を廻向しても、往生の希望は達せられぬ。南無の願がなければならぬ、彌陀は虚行は廻向なされぬ。行には必ず願が具してある。故に四字と雖六字である。南無の二字も亦其れで、二字と雖六字である。之を隣派の等心院は、山影入門推不出、月光布地掃還生といふ句を引いて、此光景を説明した。四字と思ふてもそれは凡夫の妄情である、掃へども生じてある、四字に二字は、元々本々具してある。離れた

り、ちぎれたり、なくなつたりするのでない。佛體が名號に具してあるといふも、之に例して知るべきである。

衆生の行と祖師の言はれた衆生の一語は、南無の存在せるを示す標幟である。其本は、彌陀は爲衆開法藏と仰せられ、釋迦は令諸衆生功德成就と説かせられた。衆の爲の法藏である。衆生の功德成就である。此法藏功德を、善導は、衆生の所有となつた意味に於て、卽是其行、卽往生成佛の因行と釋された、因行と雖果徳である。果徳を衆生の因行とした標幟は南無の二字である。南無のある四字、其れを衆生の行と釋され、衆生の行なる故、四字でなく、六字の選擇本願の行であると仰せられたものである。

南無阿彌陀佛の廻向である、南無阿彌陀佛といふ本願をたてましたして南無阿彌陀佛となりまします。當流安心の一義はたゞ南無阿彌陀佛なり。(以上祖師及蓮師の語)然るにも拘らず、六字釋がわからずして、妄想手造りの安心を製造し、安心の正否を論ずるなどは、大膽至極である。佛體をたのむが正統の安心ぢや、名號を所歸とするは異轍ぢやなど、罵り騒ぐは、子供の喧嘩のやうに見える。是も本氣になつて、宗旨を傳へるといふ底がぬけてゐるからである。商賣根性が主になつてゐるからである。

以上述べ來つた祖教に依れば、歸命無量壽如來と云ふも、偈頌の定りとして、先づ歸敬の爲に擧るので、猶讚阿彌陀佛偈に、先づ南無阿彌陀佛を掲げられしが如し。或は所讚の法體を擧るゝするも可なり。若し之を安心とすれば、無量壽如來も、上の尊號銘文の、盡十方無碍光如來と同じく、阿彌陀佛であつて、卽是其行の法である。眞實明に歸命せよ、平等覺に歸命せよ、亦同例である。是の如くであるから、祖師の文證な

く、其義門も理證なければ、所信は名號、所歸は佛體の説は、成立せず、語あるのみで義なしである。

本章の終に臨んで、人と法との所歸を調停する一説を批評して終局とする。某學者は、尅實門相從門と云ふ名目を設けて、相從門のときは、人を法に従へ、又法を人に従へる、法を人に従へれば、盡十方の無碍光佛等と云ふが如く、人を所歸とし、人を法に従へれば、名號の上で能歸所歸を分つ、もし尅實門のときは、人は四字尊號、法は六字尊號なりと云ふ。

相從門と云へば、いかめしい名であるが、やはり遷就調停の手段に過ぎぬ。人を所歸とする阿彌陀様を、おたのみ申すといふ佛體をたのむ安心、法を所歸とするときは、名號の上で、能歸所歸を立つるといふは本願をたのむ、他力をたのむ等の祖師の安心を指すので、名號をたのむ安

心、此中法を人に従へるといふ盡十方の無碍佛を人と見たは、既に前に云ふが如く、人ではなく法なのである。立派な學者でありながら、祖釋を精究せざる過失から、かゝる二種の安心に至つた。究極の意旨は、雙方の面目を損じないやうに、喧嘩の仲裁的態度をとつて、法の興廢人の浮沈は、第二となり、調停遷就法を、學者らしく、巧に用ひたに過ぎないのである。

此説を立てた人は、相當の學者であつたが、事なかれ主義横溢の環境と、因習の爲に、學問眼を掩はれた爲ではあらうが、惜しいことである。近世のわが學者の多くは氣魄なく男性なく、近來はますます此氣風を増長したやうである。爲に簡潔明晰なるべき眞宗の安心が、多岐紛々、枝葉百出、八重葎しげれる宿、若しくは茫莫渺漫で、捕捉することが、できぬやうになりをはつた。



佛教は何の宗派をいはず、因果を原則とする、佛果を得むとするには、佛因でなければならぬ。因果を無視するならば、彌陀は衆生に、念佛や信心を注文するに及ばず、信心も念佛も捨て、おいて、ひつさらへて、一切一時に佛になされてよい筈である。然るに願を發し行を修して、衆生得果の道を開かせられ、獲信の人のみ、入涅槃の果を得るは、因果の理法が、嚴として存在するからである。祖師が信心を、證大涅槃の眞因と申されたは、是が爲である。

佛教の全體を通じて、歸敬するは、佛法僧の三寶である。何故に歸敬するか、佛は教主であるから、法は因であるから、僧は因を修する先輩であるから、是故に歸敬する。此三寶の中、正しく佛因其ものは法である。法に階級がある。法に階級のあるは、修する人の根性に階級があるからである、此階級を満した最上級が等覺である。

佛は教主ではあるが、佛因ではない、佛因は法である。是に依て、佛敎者は、法に依て（依るはたのむのである、商人は商業に依り、工人は工業に依り、技人は技に依るの類、皆たのむのである）佛果を得る、法に依るといふ依る相が、十信に信を満し、十住に空を修し、十行に假を修し、十廻向に中を修し、十地に眞中を修満した所が等覺である。

但し是は自力聖道の依りかたである。他力淨土門の依りかたは、獲信の一である。之を元祖は、佛の本願に依るが故にと仰せられた。依るは即ちよりのたのむのである。佛の本願は法である、而して所成の法である。佛は此法を能成した人である。所成の法は、凡夫が佛果を得べき佛因を能成せられたので、我々は此佛因（即法即名號）に依て（即ちたのむ）佛果を得ると信じた安心である。

能成した佛が佛因ではない、所成の法が佛因である。此佛因をたのむ

ので、即ち名號は廻向の佛因、此佛因其ものをたのむのである。佛因外のあるものをたのむのでない、我の所有、即ち得するもの（法）をたのむので、得しないものをたのむのでない、祖師が如來の至心信樂をふかしたのむべしと仰せられたは是である。

たのむといふは、他人に面倒をたのむといふ意味でない、力にすることである。佛の力即ち他の力を我力にする、之を他力といふ。龍樹の仰せられた無量力である。たのむの定義は、祖師のよりたのむと仰せられたが眞宗の定義である。人に向ふて、金をくれとたのむ、困難艱苦を救ふてくれとたのむの同意義と誤り考へるから、佛體といふ人格をたのみたくなる（蓮師の我等が今度の一大事の後生御たすけ候へとたのむと仰せられたとは雲泥の相違である、其れは後章に詳にする）此人格をたのむのは、人格が、承諾したといふ返答を聞く迄は、なるかならぬかわ

からぬたのみ心である。其れをよりたのむなら、おしかけ客で、よりたのむにはならぬのである。廻向の法をたのむでなくては、よりたのむにはならぬ。廻向の佛因をたのむのであるから、承諾したの返答を聞くのに及ばぬ。返事を聞きたいたのみ心でない。

返事を聞きたいたのみ心ならば、たのむと信ずることは、究竟して別である。何故ならば、人をたのむは承知したの返答を得ねばならぬ。返答とは何か、たすけるといふ返答である。信には返答はいらぬ。たのむ心の廻向と共に、たすかることを信ずるのであるから、其れ故、人格的佛體をたのむ安心の人は、おたすけが分明ならぬ、（こゝに蓮師の巧方便の感服すべき事がある其れは後章に譲る）おたすけの分明ならぬ所から、秘事法門又は異安心が生ずる。

人格的佛體をたのむ安心は、先づ佛體をたのむ心がおこる、此心がお

こゝから彌陀が廻向なされるといふ順序となる。之を試るには、彌陀の廻向は、たのむ心の前にあるか後にあるかの答を求め。佛體をたのむ安心は、たのむを前とし、廻向を後とする、此前後は同時の前後なるは無論である。同時の前後とは、叩くも鳴るの同時なるが如く、而して前後はある。叩けば鳴るであつて、鳴つて叩くではない、同時なれども前後はある。若廻向が後なれば、たのむ心は廻向でないのである。廻向でないたのむ心なれば、無論自力の心である。信心といふは、本願力廻向の信心なりでない信心となる。

若し答て、否、たのむ心も廻向であるといふは、彌陀をたのむの彌陀は佛體でない。彌陀は、法は廻向なされるが、佛體を廻向なされるといふことはない。若し所歸は廻向の外と云はゞ、機法一體といふ義門は、立たぬ、蓮師云(四十四)南無の二字は、衆生の彌陀をたのむ機のかたなり。

また阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生を、たすけたまふかたの法なるが故に、是すなはち機法一體の南無阿彌陀佛とまうすこゝろなりとある。南無の二字は衆生の彌陀をたのむ機のかたが、阿彌陀佛の法と一體なるは彌陀をたのむの彌陀が、阿彌陀佛なるが故で、随つて二字と雖も六字である。阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生をたすけたまふかたの法で、南無の機と一體なるは、たのむ衆生といふは南無である。故に阿彌陀佛にたのむ機は收りてあるから、四字と雖も六字である。そこで機法一體である。之を阿彌陀佛四字は法、彌陀をたのむといふ彌陀は人格的佛體であるならば、南無と阿彌陀佛とは離れたもの、一體ではないのである。歟と柄とを、つぎあはせた一物で、二體が一つになつたので、一體でない。

前に出だす學者の相從門は、何の必要の爲に人を法に従へるのか、何の必要の爲に、法を人に従へるのか、必要の理由がなくては、義門即相

從門なる一門を立つる理由がない。理由のない義門は無用の長物である。尅實門の四字は無量壽佛なる佛體で、法は南無阿彌陀佛の名號であるといふ一門中の、法のみ心安を建立すれば足るのである。然るを佛體をたのむといふ一類を救はむとするから、相從門などいふ、くだらぬ法門だてをせねばならぬ。其本は、佛法僧三寶の通義を亂し、佛體を佛果に至るの佛因の中に入れむとするからで、其此に至るの起因は、人に困難事の解決をたのむの意義、意義といはむよりは、慣習の言づかひを、安心に持來つて、強て嵌込まうとした、誤謬から生じたのである。

公正平心な考を以て、祖釋を伺へば、祖師は決して佛體をたのむ安心でない。祖師になき安心を成立する爲に、祖師の安心と同じ安心を、異安心呼はりをするは、狂氣の沙汰より外は考へられぬ。

此種の人、一に祖師と所歸を異にし、二に祖師と能歸を異にす。而して祖師の安心を異安心とす。桀の犬、堯を吠るといふに近し、所歸を異にすとは、祖師は、法を所歸となされ、此人は佛體を所歸とす。能歸を異にすとは、祖師はよりたのむと仰せられ、此人は厄介をたのむ意味とす。平心に思考せられて、祖師と同一の安心となられむことをいのる。

◇書圖兌發社會式株版出外中◇

|  |                                      |                                      |                                   |                                     |                                       |
|--|--------------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|---------------------------------------|
| <p>野々村直太郎著<br/><b>淨土教批判</b></p>        | <p>橋川正著<br/><b>蓮如上人の和歌</b></p>       | <p>大谷光演著<br/><b>この大災に遇うて</b></p>     | <p>石川舜台著<br/><b>地獄と極樂</b></p>     | <p>石川舜台著<br/><b>心性學說</b></p>        | <p>石川舜台著<br/><b>眞宗安心の根本義</b></p>      |
| <p>嚴正なる宗教批判書としての權威 第十六版</p>            | <p>宗教的大家格者の情意生活を表現せる好著</p>           | <p>大震災災の體驗よりして絶對の信仰を高調す</p>          | <p>佛教哲學と現代學說より地獄極樂を説破す</p>        | <p>佛儒二教の深遠なる境地より心の本性を明す</p>         | <p>眞宗安心の根本教義を開闡せる不朽の名著</p>            |
| <p>四六版背クローズ<br/>定價金一圓四十錢<br/>送料金八錢</p> | <p>菊半截高雅裝幀<br/>定價金八十五錢<br/>送料金四錢</p> | <p>四六版美裝箱入<br/>定價金五十五錢<br/>送料金四錢</p> | <p>四六版美裝<br/>定價金三十錢<br/>送料金四錢</p> | <p>菊版絹裝箱入<br/>定價金十二圓<br/>送料金十二錢</p> | <p>菊版絹裝箱入<br/>定價金二圓五十錢<br/>送料金十二錢</p> |

大正十三年五月五日印刷  
大正十三年五月十日發行

【定價金貳拾錢】

著者 石川舜台

不許複製

發行者 京都市東山妙法院前側町  
中外出版株式會社代表者

土岐

印刷者 京都市新町通北小路上ル

堀井 清 横 台

發行所

京都市東山中外日報社内  
電話一七八七番  
振替大阪六四六一七番

中外出版株式會社

所刷印社文弘 所刷印

504  
278

終